

M.DRABBLE 研究

家庭崩壊・家族の行方

大野 佳代子
(英文学科)

序

日本では近年、特に若い人々の結婚観が急速に変わり、それとともに、夫婦を核とした〈家庭・家族〉に関しても、人々の意識は変わりつつある。「成田離婚」という言葉は、もう既に古くなった感がするし、「バツイチ」などという言葉も、抵抗なく若い人々の間に、受け入れられているようである。「熟年離婚」も、もはや人目を惹かなくなった。

M.Drabble は、現代イギリス社会の風俗、そこに生きる若い人達の実態を、生き生きと鮮やかに描き出すことにかけては、定評のある作家である。自分の周囲の出来事に強い興味と関心を抱いており、文章を汗水垂らして苦しんで書くなどということはない、文章はひとりですらすらと書けてしまうのだと言う¹⁾ Drabble の、初期の3作品 (*A Summer Bird-Cage*, *The Garrick Year*, *The Millstone*) には、もしかしたらこれは一種の私小説ではないだろうかと思わせるほど、作者自身の環境と似た人物設定がなされている。特に、先述の Drabble の言葉と併せて考える時、彼女の書く小説は決して無理に頭の中で拵えられたものではなく、彼女自身とは言わぬまでも、彼女の身近なところで起こった出来事、或いは起こりつつある出来事が、緻密にリアルに捉えられ描かれているのだと言ってよい。Drabble はかつて、「小説は

人生のガイドラインである²⁾」と語ったが、小説というものはしばしば時代の風俗・風潮の最先端を描くものだと考えるのは、偏見であろうか。

本稿では、〈家庭・家族が崩壊しつつある〉という日本の現況を踏まえて、Drabble の *The Waterfall*, *The Needle's Eye* を中心に、彼女の描く〈夫婦・家族〉について考えてみたい。一体、〈家庭〉とは何だろう。男にとって、女にとって、〈結婚〉とは、〈家族〉とは何なのか。Drabble の眼が捉えた、現代イギリスの中年に差し掛かった男女の、夫婦というものに対する認識とはどのようなものなのか。また、彼らは如何なる価値観をもって、人生を生き抜いているのか。それを考察することにより〈家族の行方〉を探る一助としたい。

I

Drabble の第3作 *The Millstone* は、所謂〈未婚の母〉となることを選択した若い女性の生き方を描いたものである。Drabble がこの話題作を発表したのは1965年であった。一方、我が国で〈未婚の母〉なる言葉が初めてマスコミに登場したのは、1961年であったという³⁾。「結婚することなく、子を産み育てることは果して可能か」という問題提起をした特集記事のタイトルとして、『婦人公論』誌上で使われたということである。この新社会用語は詩人の白石かず

子氏が1966年に、「結婚しないで子供を産む女たち」と題するレポートを公表することにより若い女性達の間で一躍話題になり、言葉として定着し始め、更に1971年にイギリスの22才の国会議員が妊娠を公表、「結婚はしないが子供は産む」と宣言したことにより、大新聞紙上にまで〈未婚の母〉という言葉が公式語として躍り始めた、ということである。

その後、次々に著名女性が〈未婚の母〉としてマスコミに登場するに及んで、この新造語とその概念は遍く世間に知れ渡ったのであるが、しかし、一般社会通念としては、依然として許容され難いものだったようである。1969年産んだ子を奪われた〈未婚の母〉が提訴した裁判での判決内容は、こうした〈未婚の母〉に対する当時の一般社会の差別意識を表わすものと考えられる。曰く、「産まれる子にとって、所謂私生児という不幸な境遇になることが予想されるのに、その養育に確たる見込み・方針もないままに子供を産んだ態度から、子に対する真の愛情の存在が疑われる。従って、子供を彼女の手に戻すことが、子供にとっても幸福であることが明白であるとは認め難い⁴⁾」というものであった。イギリスでは、「1969年離婚改正法」により協議離婚が可能になったが、1970年代前半にかけて特に、“子供を独りで育てる女性”や、“殴られた妻達”が問題になっていたという⁵⁾。法律は改められても、男性支配の強い社会では、夫と妻については依然旧来の支配服従という意識が罷り通っていたらしいことは、*The Needle's Eye* に於ける Rose の離婚訴訟を扱った判事の、夫の暴力を容認する次の言葉にもよく表われている。

he (= the judge) spoke of things that any man might do (violence to his wife) under provocation, and seemed to think that a few blows one way or the other were the normal fare of married life.⁶⁾

因みに1971年当時、自らの意志で〈未婚の母〉となっている44名の女性を対象に、東京・北海道で行なわれたアンケートの結果では、彼女らの教育程度は高卒7%、短大卒22%、残り71%

が4年制大卒であったという⁷⁾。ほんの一握りの女性を対象にした調査結果とは言え、男性に結婚を拒否されてやむをえず〈未婚の母〉となったのではなく、自らそれを選択した女性の大半が高学歴者であったということは、*The Millstone* の Rosamund と重ね合わせて考えると、非常に興味深いことである。

要するに、ちゃんと結婚して両親で子供を育てることが当り前と考えられており、それ以外の形態は、子供を育てる環境としては容認し難いというのが、当時の社会通念だったのである。しかしその一方で、離婚に踏み切る人は確実に増えていった。1960年代前半の離婚率は0.7台であったが、60年代後半からは上昇し続け、83年には1.5とピークを示したという⁸⁾。

文学の果すべき役割について、Drabble は「小説を読むことによって我々は、様々な既知或いは未知の人間に出会い、彼らの人生を通して生きることの意義を見出してゆくのだ⁹⁾」と考えている。彼女の小説には、まさにその時代・社会の人々（主として若い女性）の手探りの生き方が精密に描かれている。そのヒロイン達が時代の先端を生きているのか、それとも真ん中あたりなのか、換言すれば、Rosamund が見せたあの選択、*The Waterfall* に於ける Jane の、徹底的に受け身でただひたすら時の流れに身を任せているように見えながら、その実大胆で不敵とも思われる、情事に溺れた生き方——あれらは果して当時の同じ世代の女性たちの支持を得ることの出来る行動だったのか。それともまだまだ異端視された生き方だったのか。それはともかくとして、Drabble の小説によって、こういう生き方も出来るのだと、新たな眼を開かされた読者も多いことと思われる。

日本の女性の意識の変化については、1974年当時のテレビドラマが、女にとって何より大事なものは家庭もしくは結婚であるという価値観を繰り返し訴えていたという、村松泰子氏の指摘¹⁰⁾がある。同氏によれば、女性の自立を目指す意識が日本の女性達の中にもかなり広く浸透してきたのは、70年代後半のことであるという。当時の日本のテレビドラマは、この女性の意識の

変化を、「先頭に立って引っ張ってきた」というよりも、むしろ「後追いで、変化を反映しつつ」あったというのであるが、〈家族とは何なのか〉をテーマにした、“家族崩壊ドラマ”が多く登場し、その中で戸惑う主婦の姿を巧みにとらえている——このような動きが顕著になったのが、70年代後半だということである。

近年、シングル族¹¹⁾がとみに増加の傾向にあると言われる。結婚したい男性が多くても、結婚したがる女性が多いため、必然的に男女ともに、シングル族が増えつつあるというのだ。1990年に経企庁が発表した国民生活白書では、結婚に対する意識が変化してきたこと、結婚年齢の高齢化が顕著になってきたことが、指摘されている。これは1970年代半ば頃から女性の高学歴化が進み、その結果、男女の役割分業意識が大きく変わってきたことに起因すると言えよう。同年発表の国民意識調査¹²⁾（経企庁）によれば、68.6%の人が家族の役割は変化していると感じており、これらの変化について「時代の趨勢として避けられないもの」と考える人が約半数いるということである。しかし一方で、「申込みは非常に多いのに女性の登録が少ない。女性の間で、結婚し出産し子を養育し、家庭を作らなければならない意識・観念が、薄らいできているためだ¹³⁾」という、結婚相談所勤務の60才代の男性からの新聞への投書が示すように、女性の結婚観の変化を嘆く声は多い。先の調査でも「変化を食止めるべく家庭再建に努めるべきだと思う」と、危機感を持つ人は24%もいるのである。

家庭がどのようなものであるべきなのか、を考えることは本当にむづかしい。現代という社会はあらゆる面で、一斉にボーダーレス化へと動いているように思われるからだ。古田隆彦氏は、様々な分野に於けるボーダーレス化の進行状況を分析したうえで、90年代は大きな転換期であり、家族観についても、従来とは大きく変わりつつあると指摘する¹⁴⁾。同氏によれば、最も大きな変化は「単身化、共同家族化、非血縁化」の三つであるという。1987年の厚生省の独身者調査によれば、生涯結婚する意志のない女性は4.6%

あり、その数は5年間でほぼ倍増している¹⁵⁾ということである。若者の晩婚化に加えて、結婚を望まない女性の増加。更に、昔は「子がかすがいい」と言われ、子がある故に、偽りのものであると結婚生活を持続させたものを、近年は偽りの家庭よりも〈本物の〉単身家庭の方が選択され、離婚率も高くなる一方である。

一体、若い人達の〈結婚〉に対する考えはどのようにになり、そして〈家庭〉というものは、どのように変わって行くのだろうか。

II

男性支配の強い社会で生きていく中で、女性に対する差別・偏見に屈することなく、あくまでも自分の納得出来る生き方を模索する女性の姿を描く、というのが Drabble の小説の一つのパターンである。M.V.Libby は Drabble の主要なテーマは ‘questions of fatalism and will’¹⁶⁾ であるとし、その ‘fatalism’ を最も強く具現しているのが、*The Waterfall* の Jane の生き方であると言う。*The Waterfall* が発表されたのは1969年であるが、日本では勿論のことイギリスでも、その当時は〈未婚の母〉に対する社会的偏見は、依然強いものであったろうことは、十分に想像できる。第3作で〈未婚の母〉を描いた Drabble は、この第5作で出産直後の人妻が従姉の夫との情事に溺れる姿を描いた。人妻の不倫というのは、既に第2作の *The Garrick Year* でも扱われたテーマである。

Jane には3才の男児と産まれたばかりの赤ん坊、*The Garrick Year* の Emma には2才にもならない女兒と生後間もない赤ん坊、ともに、ごく身近な男性と不倫の関係を持つという設定は、ほぼ同じである。‘irrevocably signed away certain possibilities by getting married and having babies’¹⁷⁾ という点では、まったく同じであるはずの Emma と Jane であるが、今後どう生きていくべきかということについて下した決断は、同じものではなかった。Emma は不倫の相手と別れ、夫と子供のいる家庭へ戻ることを、Jane は夫と別れ、二人の子とともに情事の相手

James を待つ日々を選んだのであった。

不倫の関係を続けるか、断ち切るか—— Jane と Emma がこの何れかを選択する際に大きな役割を果たしたのは、子供の存在である。彼女たちはどちらも同じように、幼児と赤ん坊という二人の子供に殆どかかりきりの日々を送っている。

女は母親になると、子供のない女とは違ってきます。一夜の結果を九か月間体内に宿す間に、何かは成長します。彼女の生命から、もう決して消え失せることのない何かは成長するのです。男は愛の前と愛の後との、母である以前と以後との区別を知りません。女はいつも娘であり、母であらねばならないのです¹⁸⁾。

これは或る婦人の言葉であるが、Emma がまさにそうであった。不注意で結婚後間もなく妊娠してしまった彼女は、‘the filthy mess of pregnancy and birth’¹⁹⁾に怯えていて、とても惨めな気持ちに取りつかれていたのだが、Flora が産まれるとすっかり彼女に夢中になってしまい、その変わりように自分でも驚くほどであった。

those with children, however unwillingly with them, are in many ways irrevocably cut off from those without, (GY,p.37)

しかし、望んで産んだ子供でないためでもあろうか、Emma の心はいつも“女”と“母親”の間で揺れ動いている。彼女は自分に子供がいることが、殆ど信じられないと思うことがあり、母であることをしばしば重荷にも感じる。

I often think that motherhood, in its physical aspects, is like one of those prying disorders such as hay fever or asthma, which receive verbal sympathy but no real consideration, in view of their lack of fatality; and which, after years of attrition, can sour and pervert the character beyond all recovery. (GY,pp.9-10)

‘if small Flora is a source of joy and genuine comfort it is Flora — after all — who is innocently responsible for Emma’s despair’²⁰⁾ と Libby が言うように、Emma にとって子供は、喜びの源であると同時に、彼女の絶望の因とも

なっている。

或る時、Emma は逢引の打ち合わせをするために Flora を連れて電話ボックスに入る。Flora はその間おとなしく電話帳を玩具に遊ぶのであるが、ページ破りがよほど気に入ったらしく、家へ帰る途中も帰宅してからも、「ほん、ほん」と言い続ける。‘she yelled, “Book, book” and I was glad that she could say no more.’ (GY, p.99) これによく似た場面は *The Waterfall* にも見られる。Jane が James とベッドを共にした時、窓際の揺り籠の中で赤ん坊がスヤスヤと眠っているというものである。逢引の打ち合わせをするその傍らに子供がいる、或いは情事の相手とベッドを共にするその同じ部屋に子供が眠っているという、これらの類似した場面は妙に印象的である。それらの子供がいたいけない幼児であるために、無心であるが故に、一層心を動かされる。

更に興味深く思われるのは、きわめてよく似た状況設定であるのに、二人のヒロインの見せる反応が大きく異なることである。Emma は何処に行っていたのかと夫に問われた時、片言しか言えない幼児にホッとするが、Jane は無心な幼子であるために一層強くその存在を意識する。そして意識しすぎるあまり、彼女は子供を殆ど無視しようとさえする。

I did not want to include one man’s child in the story of my passion for another man.²¹⁾

しかし、どんなにその存在を無視しようとしても、子供の ‘small eggshell head and thin arms and soft nightly murmurs and faint breathings’ (W, p.47) は Jane の五感に訴えかけてくる。‘I’d have slept with James anywhere, ...I slept with him in my marriage bed, with our new born child as witness.’ (W, p.131) という罪の意識が、彼女の心から消えることはない。James との情事に溺れ、子供の存在を意識しまいとする Jane と、絶えず罪の意識におののく Jane。つまり彼女の中には二人の Jane がいるのである。

I felt split between the anxious intelligent woman and the healthy and efficient

mother...I felt that I lived on two levels, simultaneously, and that there was no contact, no interaction between them: on one level I could operate well, even triumphantly, but on the other I could only condemn myself, endlessly, for my inadequacy and my faults. (W, pp.103-104)

彼女は一体、自分の中にある“女”と“母親”を、どうしようというのか。異なった二つのレベルを同時に生きていくなどということは、不自然であり、やがてはジキルとハイドのように破綻を生じることになるのではないか。この我々読者の危惧に対して、Jane の出した解決策は‘fatalism’に依るものであった。‘it is all fore-ordained, after all.’ (W, p.229) この‘fatalism’が悩む Jane に選択すべき道を示す。

Libby が主張する²²⁾ように、Jane の言動には、Drabble の持論である‘fatalism’が、かなり色濃く反映されている。この物語は、James との出会い及び二人がこうなることは避けられない運命だったのだという、Jane の泣きに充ち充ちている、と言っても過言ではない。以下の引用は、何年ぶりかで Lucy に再会した時に、既に後の Lucy との確執 (James をめぐっての) の予感があったと語る Jane の言葉である。(当時彼女は7才であった。)

even then, I knew that we were embarking on a drama that would be played out not over that one summer afternoon but over the years, over a life-time: (W, p.115)

しかしこのような‘fatalism’は時として、Jane の自分勝手に独り善がりな思い込みとも受け取れる。何もかもを、こうなる運命だったのだという思考で結論づけようとする Jane は、そう考えることによって、少しでも自分の苦痛を和らげよう、居心地の良い方へ進もうとしているかのように、思われるのである。先述した、子供を無視しようとするのも、その表われであると言えるであろう。あれほど彼女を悩ませた“子供に対する罪の意識とやましき”も‘fatalism’の前では、その効力を失う。

better for children, I would say to myself,

to see their mother improperly saved than virtuously mad. (W, p.131)

上記の引用が示すように、“母親の自分が子供の為に、心に染まない選択をするのは、かえって子供の為に良くない”——これが Jane の出した結論である。

一方、逢引の最中に Flora が川に落ちた事件を契機に、Emma は Wyndham と別れる決心をする。次の引用は、別れを前にした Emma と Wyndham の会話である。

‘But what else is there in my life? What else can I have?’ ‘You’ve got a good deal, haven’t you? Anyway, you’ll be able to go back to it when the children are grown up...’ ‘But I’ll be so old. ...I want now, I want now, I want now.’ ‘Then you shouldn’t have married,’ said Wyndham. (GY, pp.160-161)

Emma は子供のために、自分の夢を追うことを諦めようとする。‘People who get married give up the here and now for the sake of the hereafter.’ (GY, p.161) という Wyndham の言葉には、妙に説得力がある。

川に落ちたときの恐怖を思い出し、泣き出す寸前の Flora の気を逸らす為に、夫婦が殆ど同じことを同時に言う場面 (GY, p.153)、皿の豆を一粒一粒一生懸命スプーンで掬って食べる幼女を夫婦が微笑みながら見守る場面は、幼い子供を中心にした夫と妻の強い結び付きがよく表われていて、印象的である。Flora の成長に一喜一憂してやれるのは自分と夫しかない、夫と今別れるわけにはいかない——これが Emma の出した結論であった。

子供の為に多くのものを諦めた Emma と、淫らであっても救われた母の方が、子供の為に良いのだと考えた Jane。どちらも“子供の為”を思って下した結論である。一体二人の選択の何れが、“子供”にとってより歓迎すべきものなのであろうか。Emma の選択は、古来、同じような岐路に立たされた女が取ってきたものと同じである。この点で、Emma は言わば“古いタイプの女”と言えるであろう。これに比して、Jane は殻を破った、新しい女であると言うことがで

きよう。

III

Emma にしろ Jane にしろ、結果的には全く相異なった選択をしたものの、彼女らの“子を思う気持”は、いずれも劣らず強く決して途絶えることはない。親の価値観・生き方が子供に及ぼす影響は、計り知れないほど大きいものだ。この親子関係のうちの、特に母と子の関係に於ける母の側の意識だけを、我々は先に見てきたのであるが、*The Needle's Eye* では、この母子間の関係が、子の側に視点を置いて描かれている。*The Needle's Eye* の主人公は Simon Camish と Rose Vassiliou である。‘Women’s novelist’ と評される Drabble であるが、この小説に関する限り、最も魅力的に描かれているのは Rose よりむしろ Simon であると思われる。一般に Drabble の小説では、女性は生き生きと説得力をもって描かれているが、男性はと言うと、単に夫として或いは情事の相手として、居ないと不都合だから登場させているだけ、といったような甚だ印象の薄い描かれ方しかされていないことが多い。少なくとも、*The Needle's Eye* 以前に発表された小説では、登場する男性は悉くそうであったと言ってもよいのではないか。*Jerusalem the Golden* で Clara が大きく脱皮するきっかけとなった情事の相手 Gabriel にしても、女性たちに比べると、今一つ印象の薄い、存在感の弱い人物になってしまっている。ところがこの *The Needle's Eye* では、Simon の姿は実に鮮やかに描かれている。

Simon には Rose の考え方と共通する部分が多い。彼は Rose との交流が深まるにつれ、妻の Julie といる時には感じられない、落ち着きと安らぎとを、彼女に感じるようになる。初めて Rose の家を訪れた時、Simon にはその部屋がひどく懐かしいものを感じられた。

it was so entirely unlike his own home,
...but at the same time he recognized it, it
was a known landscape, its very dimensions... were reminiscent of somewhere in-

tensely remembered. (*NE*, pp.44-45)

Simon は幾度も、Rose に愛を打ち明けたいという衝動に駆られる。彼はその場面を次のように想像する。

himself and Rose sitting together quietly in her dingy house, or walking in the country, or visiting his mother ... or going together to a dinner or a party. Talking over the headlines in the paper. Discussing his cases. Africa. Trades Unions. Politics. Students. Other people. The future. (*NE*, p.290)

Rose と自分が性格も趣味の点でも、とてもよく似ていること、これが Simon が Rose に惹かれた原因であった。特に、家とか財産といったものに対する考え方は、基本的に同じであると言ってよい。しかし、Rose が富を徹底的に拒否し ‘I’ll never possess anything, I said to myself, that I fear to lose.’ (*NE*, p.86) という子供の頃に立てた誓いを、あくまでもきっぱりと少しの躊躇もなく実行し、清貧の生活を続けしかも満足しているのに比して、Simon の方は、観念的には同じように考えていても、実際に取っている行動は、全く正反対のものになってしまう。そこが Simon の魅力である。己れが理想としているもの、こうあるべきだという像と、現実の自分の行動とが一致しておらず、しかもそれを苦にして絶えず己れに対して腹を立てているという、Simon の愛すべき人間像は、ひどく現実味があって、読者の共感を呼ぶ。

Simon という男は実に複雑な人間である。彼には、自分でも自分を持て余す、どうにもならないところがある。皆が談笑しているさなか、彼自身も隣り合った人と話をしながら、突如怒りの感情に駆られることが、彼にはしばしばある。どうにも抑えようのない、あらゆることに対する激しい憎しみ、強い嫌悪の情が、突然湧き上がってくるのだ。

he disliked this girl for smiling at him, he disliked Nick because he was an old friend, and Diana because she was so kind to him, and the financial journalist talking to Diana

because he was not married, and that other woman ...He disliked them all, childishly, simply for being what they were, and he liked disliking them, ... (NE, pp.18-19)

そして決して、最後には激しい自己嫌悪と、そういうこと的一切を隠して、素知らぬ顔をして生きてゆかねばならぬことの空しさを思っで一層腹立たしくなるのだった。彼のこれほどに屈折した思いは、一体何処からきているのだろう。

パーティで同席した男や女の、贅沢に慣れ切った安逸を貪るような雰囲気批判しながら、結局は皆と同じように、上等の靴を履き札束をポケットに無造作に詰め込んでいる Simon。妻にせがまれて大きな自動車を買って、自分も便利に乗り回している一方で、'he knew that this was what he himself would call corruption' (NE, p.140) と自己嫌悪する Simon。'Those that have may not reject those that have not' (NE, p.219) を思考の基本にして、'Shake down the superfluity.' (NE, p.219) を切に願いながら、一方で母の家の20倍もするような高価な家を買ってしまう Simon。

彼はいつも相容れない二つのものの中で苦しんでいる。自分という人間の中に、正反対の方向へ向かおうとしている二つのものが同居していることに気付いている。彼はこの苦しい状態から脱出しようと、絶えずもがいているのだ。彼の中にある二つの矛盾するものは、母親によって引き起こされたものであった。

It had hardly been surprising, really, that he should have been so confused by his mother's ambitions for him. (NE, p.137)

Simon は自分の母が嫌でたまらなかった。子供の頃の貧しい生活の様子は、折りに触れて彼の心に蘇ってくる。友人 Nick の家の贅沢な家具調度品を見て、自分の育った家の貧しくわびしい部屋を思い出し、感懐に耽る Simon。だがそういう時、彼の思いは必ず母親へと、辿り着くのであった。

Simon と母親との確執は、*Jerusalem the Golden* の Clara とその母を思い起こさせる。彼女も彼と同様、母親に嫌悪と反発を感じ、早く母親

から逃れたいと強く希っていた。いつ何処で何をしていても、彼女の頭の片隅には絶えず母親の存在がちらついていた。二人の育った家庭には共通する設定が目立つ。どちらも父親が不慮の事故に遭い (Clara の父は死亡、Simon の方は半身不随となる)、母親が女手一つで残った家族を養う。ひどく貧しい、切りつめた生活。賢く知的で、非常にプライドが高い母親。彼女たちは何れも、自分が果せなかった夢の全てを子供に託して、今のこの階級から一つでも上の階級へ脱け出して欲しいと、必死に子供の為に働く。

殆ど何もかもが、Clara の母と Simon の母は酷似している。次の引用は Clara の母に関する描写である。

Her mother tended to see all expenses as a sign of innate vulgarity, and had tried to instil into her children the view that the truly refined can manage without toys, clothes and entertainments.²³⁾

テレビを下品で俗悪なものだと言って、隣人を嘲笑する Clara の母と、自家用のプールやテニスコートを所有することを悪趣味だと非難する Simon の母。彼女たちには、知識と教養が人に抜きんでてありながら貧しい生活を余儀なくされている、その歯がゆさ惨めさを、周囲の人の俗物性を軽蔑することで補おうとする傾向がある。こういった母親に対する二人の感情・反応もきわめてよく似ている。母親の支配下から早く脱したいという思いがそれである。

Simon は、Clara が 'small and cramped and heartlessly cosy' (JG, p.36) できえなければ何でも好きだったように、'to grow apart into the thinner air of non-touching, into larger rooms and spaces' (NE, p.54) だけをひたすら望んだ。自分が育った家庭と全く異なった雰囲気を漂わせるものに、彼らは二人とも激しく惹かれるのである。Clara は Denham 家の人々に、Simon は Phillip 家に。そして Clara は Denham 家の次男 Gabriel に恋をし、Simon は Phillip 家の娘 Julie と結婚するのである。

Clara と Simon には、育った家庭環境の酷似している為であろうが、母親に対する確執を含

めて、共通した部分が既述のように、多くある。しかし勿論、歴然と違う所もある。それは何といても Clara の持つ若さと、未知なるものへの飽くことを知らぬ、強い好奇心である。彼女にとって、駅という場所はいつも 'a place instinct with glory' (JG, p.60) であった。新しい体験に出合って彼女がドキドキする様子は、いかにも初々しく好感が持てる。彼女は良い意味でも悪い意味でも好奇心の強い人間である。自分が今まで知らなかった世界に接した時、彼女は 'a sudden, piercing, painfully beautiful vision of a life' (JG, p.55) を感じてワクワクする。そのような彼女を Gabriel は次のように観察する。

he thought that he saw in Clara a more voracious simplicity, a need that did not pay too much attention to the sources of its satisfaction. (JG, p.150)

このように Clara と Simon を並行させてストーリーを見ていくと、男女の性は異なっているものの、Simon は Clara の分身或いは数年後の姿である、とも言えるのではないだろうか。Clara は物語の終末部分で、母親の死に直面して初めて、母親にも自分と全く同じような若い頃があったこと、母も自分と同じように希望に燃え、未知の世界に胸をときめかせていたことがあったのだということを知って、母親に対して長い年月抱き続けていたわだかまりが氷解していくのを感じる。物語の終末部での Clara は母親の束縛から解放されて、若さにふさわしく明るさと自由ではち切れんばかりである。彼女はこれから愈々自分の人生を生きるのである。今彼女の目の前には 'a bright and peopled world, thick with starry inhabitants' (JG, p.206) が果てしなく広がっている。

Her mother was dying, but she herself would survive it, ...Even the mercy and kindness of destiny she would survive; they would not get her that way, they would not get her at all. (JG, p.206)

上記に引用した文からは、Clara の新しい人生に対する激しい意気込みが感じられる。母親の死とともに、バラ色のスタートを切ったところで、

Clara の物語は終るのであるが、Simon はどうであろうか。(彼の母は健在である。) 彼の場合は、Oxford を出て弁護士になり母の悲願通り、労働者階級から脱け出すことが出来た。実業家の娘 Julie と結婚したことにより、周囲も彼を初めから今の階級にいる人間として扱っている。言わば「バラ色のスタートを切ったところ」から、Simon の物語は始まったのだと考えることができよう。この点から考えれば、前述した如く、Simon は Clara の後身であるという見方も可能であろう。

Simon の母は、彼の為に一生懸命働いた。彼は母に押され続けて、現在居るところまでやって来た。'He loved his mother now, he had come round to loving her, or as near as he would ever come to loving so repelling a woman.' (NE, p.131) というように、今は時折、母に感謝する気持にもなる Simon だが、長い間母を憎み続けてきたというその思いが、彼の脳裡から消えることはない。彼がこれまで母の言うままに生きてきたということ、'he had done it for her' (NE, p.131) という意識は、母に対する憎しみを生み、彼の心の中にいつまで経っても消えることのない、大きなしこりとなっているのである。Simon は“母”という呪縛から自身を解放することが出来るのであろうか。

どんなに彼が反発しても否定しても、彼の体には確実に母の血が流れているのだ。'excessive delicacies' (NE, p.186) は間違いなく、母から受け継いだものであった。自分が受け継いだこういう性格が厭で、母の住む世界から逃げ出そうとし、そのために Simon はまったく正反対のものを持った人間である(と見えた) Julie と結婚したのだった。だが、母の性格(生き方)を否定しているにもかかわらず、その実いつの間にか母と同じ考え方をしてしまっている彼にとって、Julie はあまりにも母と違いすぎた。彼女は彼の仕事をひどく嫌い、彼がもっと面白いことをしてくれるといいのと思っていた。

Simon にとって Julie はだんだん耐え難い存在になっていく。子供に対しても、彼女は母とは全く違っていった。母には確固とした(良いにし

ろ悪いにしろ) 目標・指針があったが、Julie の子供に対する態度は、‘yell at them and indulge them, irrationally, wantonly destructively’ (NE, p.71) というものであった。しかし Simon はこれを傍観しているだけである。Julie に対しても子供たちに対しても、Simon の取った態度は、傍観者のそれであった。彼の意識はずっと昔の“自分と母親”に、いつも向けられているのだ。彼は Julie を批判し、子供たちのことを憂えているが、だからといってそれを改善すべく、自分が努力するということはしない。Julie に対する批判も、彼の心の中で秘かにされるだけである。あまりにも立派な母親を持った為に、〈強い女性〉(Julie も或る意味ではこのタイプなのである) に対しては萎縮して思うことが言えなくなってしまうのだろうか。彼は Julie がどんなに激昂し、彼を面罵しても、決してそのような Julie を、真正面から受け止めようとはしない。

He sat there, running one finger round the rim of his empty glass, waiting for her to run down’ (NE, p.191)

彼は Julie を刺激しないように、ただ黙って嵐が止むのを待つだけである。‘the line of no resistance’ (NE, p.191) これが彼の妻に対する一貫して取ってきた態度であった。或る意味では、Simon は妻に対して、自分の心を閉ざしてきたのだとも言える。彼が妻に対して心を開けば、妻もおそらく彼の望む方向へ変わってくるかもしれない、彼が父親としてもっと働きかければ、子供たちとの関係も好転するかもしれない、ということに Simon はなかなか思いが至らない。

このように果てしなく、過去にがんじがらめにされていると思われる Simon を救ったのは、Rose であった。

IV

既述の如く、*The Waterfall* の Jane は James との出会い・情事を含めた自分の生き方の一切を、こうなる運命だったのだと考えた。Libby が指摘する²⁴⁾ ように、このあまりにも運命に服従した Jane の生き方に対する不満が、Drabble

に次の作品 *The Needle's Eye* を執筆させたのかもしれない。運命に逆らおうとしなかった Jane と異なり、*The Needle's Eye* の Rose は徹底的に周囲に逆らい、あくまでも自分の信念を貫こうとする。ほぼ30年間の彼女のこれまでの人生は、‘the conflict between will and circumstances’²⁵⁾ の歴史であったとも言える。

三人の子の母であり、かつ離婚した為に自分で生計を立てねばならない Rose の暮しぶりは、同じように三人の子を育てながら執筆活動をした Drabble 自身を彷彿とさせるような、生活感に溢れた筆致で描かれている。彼女が今の暮しがとても幸せだと言って、日常の暮しぶりを Simon に語る以下の引用部分は、Drabble が語る自己の生活信条²⁶⁾ と全く同じである。

clean my own shoes and worry about the electricity bill and look after my own children and collect them from school and take an interest in Cheap Offers in the shops...the things I do now, they're part of me, they're monotonous, yes I know, but they're not boring, I like them, ...I do them all with love. Getting up, drawing the curtains, shopping, going to bed. (NE, pp.111-112)

明らかに作者自身が投影されていると思われるような Rose の暮しぶりは、彼女を小説の中の特別な人間ではなく、我々のごく身近によく知っている誰か、のように思わせてしまう説得力を有している。

Rose は大実業家の一人娘である。しかし、愛のない結婚をしたらしい (NE, p.99) 両親は、ともに娘に対しては無関心であった。父親の頭の中にはいかにしてもっと金儲けをするかということしかなかったし、母親は自分の健康のことにはしか関心がなく、Rose は愛情に飢えた子供時代を送った。金銭・財産に執着する父親の姿と、幼少時に乳母から吹き込まれた ‘a sense of the wickedness of riches’ (NE, p.91) は、金銭を所有することに対する恐怖感を彼女に植え付けた。Rose が莫大な財産の相続権を放棄して親の反対する男と結婚したのも、彼が ‘one of the dispossessed — doubly so, financially and racially’

(NE, pp.90-91)であったからである。父親に勧告されて生れて初めて金に困るようになった時、救われたような気がしたと Rose は Simon に語る。

I think I was — relieved. Really. Relieved. It sounds silly, but that's how it was...I'd always at the bottom of my heart believed that one couldn't get rid of money, that it would stick like a leech or a parasite, and breed and breed even if one tried to cut it out - (NE, p.105)

24才の時に手にした、£20000という莫大な祖父の遺産を、彼女はポンとアフリカ協会に寄付し、それがきっかけで夫と離婚するのであるが、以来彼女は三人の子とともに、ごみごみした汚い通りのぼろ家で暮している。

An unattractive district, no husband when you could surely easily acquire one, no money when you of all people could have had it - it seems strange, ... (NE, p.111)

Simon にはこのような Rose が不可解であった。彼女はあまりにも彼とは違っていた。Simon は長ずるにつれ自分の貧しい生い立ちを恥じ、母のこと、家庭のこと、出身のこと等に関して、巧みに取り繕う術を身につけていった。

He had developed a real art of misrepresentation: ... His whole life - the clothes he wore, the car he drove, the way he spoke, the house he lived in - was an act of misrepresentation. (NE, p.138)

Simon にとってはただ惨めなだけの、屈辱的ですらあった貧しい生活、爪に火をともしような極端な儉約生活。それを Rose が自ら求め、しかもその中に喜びを見出しているということは、彼には驚きであった。これを Simon は、Rose は貧乏人の生まれではないから、貧乏を楽しむことが出来るのだろうと考えた。

It was all very well for Rose to live in a dump that spoke of his worst fears, because those fears had never been real to her, as they had to him: she could amuse herself with the experience of poverty because it

had never seriously threatened her. (NE, p.138)

このように考えることでしか、Rose の生き方を理解出来なかった Simon であるが、Rose と話す機会が増えるにつれて、彼女の信念に徹した生き方に、共感を覚えるようになっていった。

He liked her, he truly liked her. If he was deceived, he was willingly deceived. ...He thought he understood her. He wished to understand. Such a modicum of good will (for so he thought it) was nothing less than a re-birth in his nature. (NE, p.170)

同じようにひどく切りつめた貧しい生活をしていても、Simon の母と Rose には、明らかに違いがあった。以下の引用は、Simon の記憶にある母の姿である。

If she had not aspired she would have sunk or died. Oh, Christ, it was exhausting, this living on the will, this denial of nature, this unnatural distortion: (NE, p.188)

Simon 一人に、己れの夢と希望の一切を託してひたすら働き抜いた母親。そして皮肉なことにそういう母親の必死の姿が、彼の彼女に対する憎悪を育んだのであった。Simon のために生きた母の人生とは、一体何だったのだろうか——この思いが Simon を苦しめる。

It was for him that she had hoped, and so on, through the generations. And to what end, to what end, to what right end of life, to what gracious form of living to what possible joy, there was nobody who had achieved it, there was no achieving and no arrival, there was merely a ghastly chain of reiterated disillusion, (NE, p.189)

一方 Rose には、Simon の母のような“遮二無二さ”はない。彼女の生き方には、ゆとりが感じられるのだ。以下に Rose が語るのは、生活に関する彼女の基本的な考え方である。

look at me now, living here in this little house, ...I pay my way and live as modestly as I can, but there are always people to ask me out, and newspapers to pay me or at

least feed me and give me drinks when I want them, (NE, pp.105-106)

つまり、Rose には他人の好意・善意を、素直に有り難く受けようという、柔軟さがあるのだ。子供たちに関しても、Rose の対し方は Simon の母とは大きく異なる。Rose は、子供にそっくり自分の夢を託し自分は子供のために生きる、という生き方はしない。彼女にとっても子供は、何物にも代え難い“希望”であることは、間違いないのだが、彼女には、あくまでも自分の夢—社会に役立つ人間でありたいという—を自分で実現させようという姿勢がある。

Rose と知り合い、彼女の生活ぶり・信念を見聞きするにつれて、Simon は徐々に変わってゆく。彼女の部屋を訪れた時に Simon が感じたことについては、前に触れたが、以下に引用するのは、その後の彼の意識の変化である。

And having reached this clear, empty space, they would wish once more to find touching, to find chosen, not accidental warmth, to find intimacy and contact. (NE, pp.54-55)

彼は子供たちと積極的に触れ合う機会を持つとし、以前は煩わしきから避けてばかりいた妻に対しても、心を開いて対話するよう努力しようとする。Rose の存在は Simon にとって、‘a re-birth in his nature’ (NE, p.170) の原動力となったのである。

結び

以上、子を持つ母親としての女の、様々な生き方を見てきた。何れの場合も、彼女たちは子供とは離れられない。夫婦・親子という人間関係が幾重にも絡み合ったその中で、悩み苦しみながら自分の納得出来る生き方を探ろうとする彼女たちは“母親でありたい”願いと、“自由な一人の女でいたい”望みとの間で、絶えず揺れている。自分の中の、一人の女としての欲求には目をつぶり、夫と協力して子の成長を見守ることにした Emma と、父親が誰かなどということとは問題ではない、愛情を持って優しく育てること

の方が大切なのだと、偽りの家庭を拒否する Jane。Rose が物語の終末部で見せた決断も、Emma と同じものであった。しかし Emma とは異なり、Rose には夫に対する愛情などもはや、かけらもない。夫と一緒に子の成長を楽しむのではなく、夫に子供を独り占めされない為に、Rose は復縁を決意するのである。裁判に訴えてまで勝ち取った離婚であったことを考える時、Rose のこの選択は、幾分説得力に欠けるように思われる。

The Needle's Eye では、Rose の生き方よりもむしろ Simon の生きる姿に、我々は心を奪われる。彼は殆ど父親不在と言っていい家庭で育った。家庭を社会の最小単位であるとするなら、Simon は言わば〈母権社会〉で育ったのだと言える。「古来多くの人間が、女性については数え切れないほど書いてきているのに、男性について書かれたものは殆どないのは何故か²⁷⁾」という疑問に対する一つの答えが、男性支配の社会であるためだとするなら、Simon はまさしくその逆のケースである。

Drabble は *The Needle's Eye* に於て、〈母権社会〉という状況の中に置かれた一人の人間の精神の軌跡を描こうとしたのだという解釈は、不当であろうか。Rose の存在は、Simon をこのような苦境から救済する役割を果たしているに過ぎない。子である Simon は、同時に三人の子の父親でもある。彼の（現在の）家庭は決して〈母権社会〉ではない。むしろ、〈母親不在〉と言った方が適切な位の家庭である。Julie と Simon の間に執拗に広がっていく相互不信の結果、言わば〈崩壊寸前〉の家庭である。しかし彼の家庭は、Rose によって救済された Simon が父親としての自覚を強め、妻に対する態度も少しずつ変えていくことにより、おそらく崩壊は食い止められるであろう。

アメリカでは、1970年から79年までの10年間に、離婚・同棲・単親の子がそれぞれ倍増し、独り暮らしの者も60%増加したという²⁸⁾ことである。この現象が社会問題化し、時の大統領は「全米家族会議」を開催したということだが、〈家族・家庭〉に関する価値観は、その後ますます多様

化する一方である。Drabble が描いてみせた、Rosamund 或いは Jane のような生き方も、今ではかつてほど異端ではなくなっている。結婚観がどのように変化しようと、家庭がどれほど崩壊しようと、女が〈産む性〉であるという一事のみは、永久に変わることはないとするれば、今後の〈家庭の行方〉を大きく支配するのは、男よりもむしろ女（母親としての）なのではないだろうか。しかし、様々に新しい女性の生き方が可能になってくると、そこで新たに生じてくるのは、Simon に具現された如き〈母権社会〉に於ける〈母と子〉の問題であろうと思われる。この意味で、*The Needle's Eye* は幾つもの異なった視点からの読みが可能な、現代社会の抱える問題点を多く内蔵した、小説であると言える。

付記：テキストは Penguin Books の *The Garrick Year* (1981), *Jerusalem the Golden* (1981), *The Waterfall* (1982), *The Needle's Eye* (1981) を用いた。

註

- 1) "An Interview with Margaret Drabble" conducted by Nancy S.Hardin, *Contemporary Literature*, XIV,3 (Summer 1973), p.275.
- 2) *ibid.*, p.279.
- 3) 大原健士郎・岡堂哲雄編『現代人の異常性4、現代家族と異常性』 p.136. 至文堂 昭和51年。
- 4) 同上 p.140.
- 5) 『ジュリスト増刊総合特集3、現代の女性一状況と展望』 p.265. 有斐閣 昭和51年。
- 6) *The Needle's Eye*, *op. cit.*, p.94.
以後の引用は NE と文中に記す。
- 7) 『現代人の異常性4』前掲書 p.137.
- 8) 国際女性学会シングル研究班『シングルウーマン』 p.197. 有斐閣選書 1988年。
- 9) Hardin, *op. cit.*, p.279.
- 10) 『家庭科教育—性役割意識を問う』 pp.127-134. 家政教育社 昭和55年。
- 11) 国際女性学会シングル研究班の解釈による。(法的配偶者のいない人)
- 12) 日本情報教育研究会編『日本の白書』 p.171.

- 13) 『シングルウーマン』前掲書 p.208.
- 14) 古田隆彦著『ボーダレスソサイエティ』 pp.65-77. PHP研究所 1989年。
- 15) 同上 pp.66-67.
- 16) Marion V.Libby, "Fate and Feminism in the Novels of Margaret Drabble", *Contemporary Literature*, XVI,2 (Spring 1975), p.176.
- 17) Ellen C.Rose, "Margaret Drabble: Surviving the Future", *Critique*, XV,1 (1973), p.7.
- 18) ボイテンディク著 大橋博司・斉藤正巳 訳『女性』 p.49. みすず書房 1978年。
- 19) *The Garrick Year*, *op.cit.*, p.27. 以後の引用は GY と文中に記す。
- 20) Libby, *op. cit.*, p.177.
- 21) *The Waterfall*, *op. cit.*, pp.47-48. 以後の引用は W と文中に記す。
- 22) Libby, *op. cit.*, 参照
- 23) *Jerusalem the Golden*, *op. cit.*, pp.71-72. 以後の引用は JG と文中に記す。
- 24) Libby, *op. cit.*, p.176.
- 25) *Loc. cit.*
- 26) Hardin, *op. cit.*, p.276.
- 27) 『女性』前掲書 pp.20-21.
- 28) 『家庭科教育—1980年の家庭問題』 p.11. 家政教育社 1981年。